

全国から“ゆめ旅”届けます！ ～withコロナ時代だからできることを～

一般社団法人 オリパラ KAIGO Next Action
〒150-0036 東京都渋谷区南平台町 6 番 11 号

助成事業の概要

「ゆめ旅 KAIGO! 2020」プロジェクトの一環として、4 回目となるフォーラムの実施を企画した。当初は「ゆめ旅 KAIGO! 2020 で広げよう！～誰でも自由にどこへでも～」と銘打った集合型の研修事業（フォーラム）を 7 月頃の実施で予定していたが、東京オリンピック・パラリンピック開催が延期となったことから、時期やテーマを変更し、オンライン形式によるフォーラムに切り替えたうえで次の通り企画・実施した。

実施日：2020 年 11 月 7 日（土）

13:00～15:30

テーマ：「全国から“ゆめ旅”届けます！～with コロナ時代だからできることを～」

形式：スタジオからの中継 + オンライン会議ツール「Zoom ウェビナー」による参加約 100 名

内容：基調講演「コロナ時代の「距離」を考える」馬場拓也氏（福）愛川舜寿会常務理事／
つながる「ゆめ旅」!!～北から南から中継・レポート～／ゆめ旅活動報告、ガイドブック、ボランティアマニユアル出版報告／特別出演 家族バンド「かねあいよよか」ほか

事業の成果

このプロジェクトは様々なメンバーによって構

成されており、旅行業界関係者、介護従事者、要介護高齢者、障害者、学校関係者、ミュージシャンなど多岐にわたるほか、活動の場も全国各地広範囲にわたっている。はからずも今回はオンラインフォーラムという形を通じてメンバーや関係者が一堂に会し、各々の活動紹介や考え方についてリアルタイムで共有する場となった。

基調講演「コロナ時代の『距離』を考える」では、高齢者施設などの介護現場において「距離」について見直しが必要から「ソーシャルディスタンス介護」という新たな考え方を講じてきたことや、これからのケアのあり方などについて、講師の馬場拓也氏による実践を踏まえて紹介された。続いて「つながる「ゆめ旅」!!～北から南から中継・レポート～」では、オンラインフォーラムにふさわしい、北海道から沖縄まで計 7 つの団体・個人による現地活動についてリレー形式で紹介され、同じく全国からオンラインを通じて集った人たちとの双方向的なディスカッションも展開された。このほか、フォーラム時期にあわせて編集、発行した 2 つの出版物「ゆめ旅ガイドブック」（電子書籍）、「ゆめ旅ポッチャマニユアル」（冊子）の紹介と配布も行われ、さらには世界中から注目を集めている小学生ドラマー率いる家族バンド「かねあいよよか」さんがプロジェクトへの賛意を込めて北海道から特別出演。MV 演奏と、元気であたたかいメッセージがライブ配信された。

ゆめ旅プロジェクトでは、過去 3 回のフォーラムにおいても一部オンラインによる参加や中継を行ってきたが、今回はほとんどの内容をオンラ

インによって行うこととなった。結果、地域的な事情や障害・病気などにより移動や外出が困難な人にとっても参加しやすいものとなったほか、「入退室自由」といった気軽さも相まって延べ100名がこのイベントにかかわった。コロナ禍による制限の中でできることを試行的に行った結果ではあるものの、オンラインを有効に活用したことで、今後のイベントや研修開催における新たなノウハウの蓄積にもつながった。

一方で、本来であれば東京オリンピック・パラリンピックの開催時期にあわせ、プロジェクトのスローガン「『人生2度目の五輪観戦』の実現」の節目となる事業を企画実施する予定であったため、本来の趣旨とは少し距離を置いた内容のものとなった。それでも参加した人からは、プロジェクトにかかわる一人ひとりの思いや活動、今できることを示してくれたという評価や、1年延期となった分、来季への期待を込めたエールをいただく場面もあった。

成果の広報・公表

成果報告書を発行・配布するほか、当日の様子を編集した動画ファイルを当法人のサイトに掲載する。また、当日資料として配布予定であった冊子「ゆめ旅ボッチャママニュアル」（A5判・カラー12ページ）については、希望者に後日配布し、今後の研修、セミナー、イベント出展などにおける活動紹介資料として活用する。

また、今回の事業実施にあたった大学生メンバー（千葉、高知ほか）が引き続き学内外での広報に努めており、他の高齢者施設やNPO団体との連携の話などもあり、引き続きこれらの成果が期待できる。

今後の展開

延期となった東京オリンピック・パラリンピックの開催をいよいよ次年度に控え、当法人の活動も大きな節目を迎えようとしている。コロナ禍の影響は引き続き予断を許さないものの、諸々の活動の最終の目的は、その成果をのちのレガシーとして活用していくことであり、そのための継続的な取り組みは何らかの形で今後も行っていきたいと考える。

とりわけ今回の事業スタイルは、テレワークが加速度的に普及した昨今のなかで今後さらに活用機会が増えるものと思われ、すでに普段の定例会やいくつかの取り組みをオンラインで行っているところである。今回の事業を通じてプロジェクトにかかわる人たちの多様性、ネットワークを再確認し、あらたな顔ぶれも加わったことで、今後も各位のサポートを得ながら、これらリソースを最大限活用していきたいと考える。